

ジクロルメタンの測定手法検討結果

目次

1. はじめに

2. 試験方法

2-1. 捕集方法の決定

2-2. 検出方法の選択 (GC-MS 法)

2-3-1. 試料の前処理

2-3-2. GC-MS 分析条件

2-4. 捕集及び分析条件

2-5. 添加回収率

2-6. 捕集後のサンプラーの保存安定性

2-7. 検量線 (直線性)

2-8. 検出下限及び定量下限

3. まとめ及び考察

4. 引用文献

1. はじめに

ジクロルメタン (DCM) は、主に、溶剤やエアロゾル推進剤として多用されている。表-1 に DCM の物理化学的性質と有害性 GHS 情報を要約した。DCM は蒸気圧の高い揮発性の物質である。DCM は、GHS 分類では標的臓器・全身毒性（単回ばく露、反復ばく露）の中樞神経系をエンドポイントとして区分 1 に分類されており、発がん性も区分 2 に分類される。表 1-2 に、国際的な機関によって勧告されている DCM の職業性ばく露限界値(OEL)を示した。表 1-3 に IARC を含む国際機関が公表している DCM の発がん分類を示した。DCM の発がん性は IARC が 2B、日本産業衛生学会が第 2 群 B と分類しており、NIOSH は DCM を職業性発がん物質として指定し、厚生労働省も安衛法第 28 条第 3 項に基づく健康障害予防指針(発がん物質)の対象物質に指定している。DCM の OEL は、50 ppm 値が ACGIH¹⁾と日本産業衛生学会²⁾によって勧告されている。本報告書では、日本産業衛生学会の許容濃度 50 ppm を二次評価値として暫定的に採用し、労働者の個人ばく露濃度を評価するために 4 時間にわたる気中 DCM 蒸気の採取（吸引速度 0.1 L/min）によって二次評価値 50 ppm の 1/1,000 を目標濃度（定量下限）として設定し、二次評価値の 2 倍の濃度と目標濃度の間に直線性の検量線が成立する定量分析法を開発することを目的とする。作業環境気中の DCM 分析法では、DCM の管理濃度として 50 ppm 値が設定され、10 分間の短い捕集時間に気中サンプリングし、50 ppm の 1/10 の濃度の気中 DCM を定量し得る捕集及び分析法が開発されている^{3, 4)}。本研究で開発された GC-MS (Gas chromatograph-Mass spectrometer)分析法は、作業環境中の DCM 分析に適用し得ることを確認することも本報告書の目的とした。

表 1-1. ジクロルメタン(DCM)の分子構造と物理化学的性質及び有害性 GHS 情報

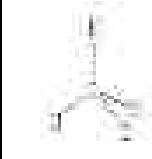
構造式		主要な用途	溶剤、エロゾル推進剤
CAS No.	75-09-2	急性毒性（吸入：蒸気）	区分外
分子式	CH ₂ Cl ₂	皮膚腐食性/刺激性	区分2
分子量	84.93	眼に対する重篤な損傷性/眼刺激性	区分2A
融点	−95.1℃	呼吸器感作性又は皮膚感作性	ともに分類できない
沸点	40℃ at 76 torr	標的臓器・全身毒性 （単回ばく露）	区分1(中枢神経系、呼吸器)、区分3（麻酔作用）
蒸気圧	349 torr at 20℃		
溶解性	1-2%水に可溶	標的臓器・全身毒性 （反復ばく露）	区分1(中枢神経系、肝臓)
比重	1.3266 at 20℃		
蒸気密度	—	生殖毒性	分類できない
安定性（分解温度）	—	発がん性	区分2
変換係数	1 ppm = 3.53 mg/m ³		
	1 mg/m ³ = 0.29 ppm	生殖細胞変異原性	区分外

表 1-2. 主要な機関によるジクロルメタン（DCM）の職業性ばく露限界値の勧告

機関	職業性ばく露限界値
米国労働衛生専門家会議 (ACGIH)	50 ppm(TWA)
日本産業衛生学会	50 ppm (170 mg/m ³)
厚生労働省(管理濃度)	50 ppm
ドイツ学術協会(DFG)	—
US.NIOSH REL	—
US.OSHA PEL	25 ppm (TWA), 125 ppm (STEL)

表 1-3. 主要な機関によるジクロルメタン(DCM)の発がん性分類

機関	発がん性分類
国際がん研究機関 (IARC)	2B
米国労働衛生専門家会議	A3
日本産業衛生学会	第 2 群 B
厚生労働省	健康障害防止指針（安衛法第 28 条第 3 項）の対象物質
ドイツ学術協会(DFG)	Group 3A
US.NIOSH	職業性発がん物質(Potential Occupational Carcinogen)に指定
US.OSHA	—

2. 試験方法

2-1. 捕集方法

文献調査から、活性炭管にて固体捕集する方法が確立されている(作業環境測定ガイドブック 5 No.5029⁴⁾、OSHA Method no 59⁵⁾、NIOSH Manual 1005⁶⁾)ことが確認された。したがって、本検討では、作業環境測定ガイドブック 5 No.5029⁴⁾、OSHA Method no 59⁵⁾、NIOSH Manual 1005⁶⁾に準拠した方法、即ち、球状活性炭を捕集材として用い、ミニポンプで作業環境空気を吸引し、ガスクロマトグラフ法に代わる GC-MS 分析法を採用した。

具体的な捕集方法は下記とした。

サンプラー：ガラス管に球状活性炭 400 mg と 200 mg を 2 層充填した（ガステック製 258A）構造。長さ 100 mm、外径 6mm、内径 4mm、第 1 層の前部にガラスウール及び第 2 層の前後にウレタンが充填されている。

測定範囲：0.05～ 100 ppm（目標濃度(二次評価値の 1/1,000)～二次評価値×2)、二次評価値 50 ppm、日本産業衛生学会の DCM 許容濃度を二次評価値として採用）

サンプラーに捕集される DCM 4.16 μ g～ 8,329.8 μ g と設定される。

サンプリング流量：0.10 L/min

サンプリング時間：最大 4 時間（採気量：最大 24 L）

2-2. 検出方法の選択

作業環境測定ガイドブック 5 No.5029⁴⁾、OSHA Method no 59⁵⁾、NIOSH Manual 1005⁶⁾では、GC の検出器として FID (flame ionization detector)が採用されているが、本方法では GC-MS を用いて GC で分離したピーク成分を MS で同定した。

2-3-1. 試料の前処理

脱着用溶媒の二硫化炭素 2.0ml を加えた共栓小試験管を 2 本用意し、ジクロルメタンを吸

着させた活性炭管の前層と後層の活性炭を別々に取り出し、上述の試験管に入れ、すばやく密栓した。これをときどき振とうし、約 1 時間放置して、上澄液を GC-MS 分析に供した。

2-3-2. GC-MS 分析条件

キャピラリカラムを GC 恒温槽内に取り付け、十分にエージングした。ガスクロマトグラフを分析条件に合わせて運転した。

最終試料液 1.0 μ l をオートサンプラーでガスクロマトグラフに導入し、得られるクロマトグラム上の測定対象物質のピーク面積を測定し、検量線を用いて最終試料液中の測定対象物質濃度を求めた。尚、定量イオンは m/z 84、確認イオンは m/z 49 及び m/z 86 とした。環境空气中濃度の計算は下記の式で行った。

$$C = c \times 2.0 \times \frac{24.47}{84.93} \times \frac{1}{Q} \times \frac{1}{\varepsilon}$$

C: 環境空气中のジクロルメタン濃度 (ppm)

c: 最終試料液中のジクロルメタン濃度 (μ g/ml)

Q: 吸引試料空気量 (L)

ε : 脱着率

決定した分析条件を下記 (表 2) に示した。

表 2 GC-MS の分析条件

装置	6890N Net Work System (Agilent Technologies 製)
カラム	DB-WAX (0.32 mm $\times$ 60 m 膜厚 0.5 μ m) (J & W 製)
注入法	パルスド・スプリット (10:1)
注入量	1 μ L
キャリアガス	He (1.0 mL/min)
注入口温度	200 $^{\circ}$ C
オープン温度	35 $^{\circ}$ C (2分)-3 $^{\circ}$ C/min-200 $^{\circ}$ C (2分)
インターフェイス温度	250 $^{\circ}$ C
イオン源温度	220 $^{\circ}$ C
四重極温度	160 $^{\circ}$ C
定量イオン (確認イオン)	m/z 84 (m/z 49、 m/z 86)



図 1-1 GC-MS による DCM の TIC (Total Ion Chromatogram)

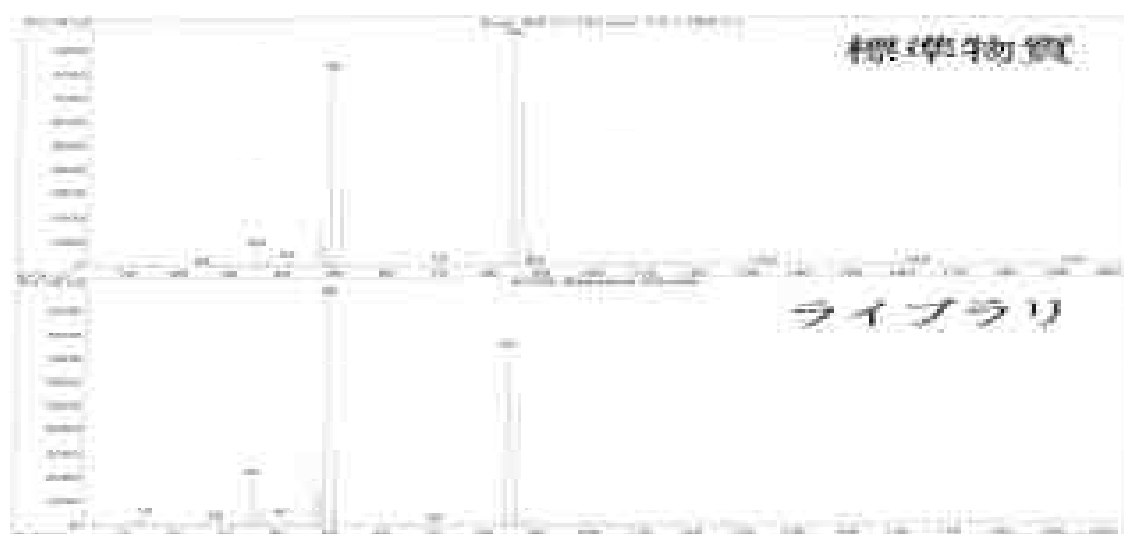


図 1-2 DCM の SIM 質量スペクトル

DCM は TIC (total ion chromatogram) とマススペクトルデータより、約 11.1 分に大きなピークとして確認された。この GC ピークは、標準物質 1,2-DCE 質量スペクトルのイオン強度比との一致から、1,2-DCE と同定した。

2-4. 捕集及び分析条件

予備検討の結果に基づいて決定した捕集方法、前処理操作および GC-MS 分析条件により行った。

2-5. 添加回収率

活性炭管に DCM 二硫化炭素溶液 (0.416 μ g/ml、4.16 μ g/ml、416.35 mg/ml、832.69 mg/ml) を 10 μ l 添加後 (各々 n=5)、室内空気 (25.0°C、40.0 %) を流速 0.1 L/min で 240 分間吸引し、4°C の冷蔵庫にて 12 時間保存し、分析を行った。添加回収率は 93.8 %~101.6 % であった (表 3)。なお、今回の検討に用いたサンプラーの Blank からは DCM は検出されなかった。

表 3 添加回収率

ジクロルメタンとしての添加量 (μg)	4時間捕集としての濃度(ppm)	相当の濃度	回収率 (%) (n=5)		RSD(%)
			Mean	SD	
4.16	0.05	目標濃度	94.2	2.1	2.2
41.6	0.5	目標濃度×10	93.8	1.9	2.0
4163.5	50	2次評価値	96.3	1.8	1.9
8326.9	100	2次評価値×2	101.6	1.7	1.7

2-6. 捕集後のサンプラーの保存安定性

活性炭チューブ（球状活性炭）に、DCM 標準液（0.416 μg/ml、416.35 mg/ml、832.69 mg/ml）を添加（10 μl）し、室内空気（25℃、40 %）を流速 0.1 L/min で 30 分間吸引した後、速やかに両端にキャップをし、冷蔵保存した。そして、捕集直後を基準として、0, 1, 3, 5 日目の保存安定性を確認した（表 4）。5 日間の保存でも、添加回収率は 90%以上であり、良好な保存安定性を示した。

表 4 保存安定性

ジクロルメタンとしての添加量 (μg)	4時間捕集としての濃度(ppm)	相当の濃度	保存日数	回収率 (%) (n = 5)		RSD(%)
				Mean	SD	
4.163	0.050	目標濃度	0	90.5	3.9	3.5
			1	92.3	4.6	4.2
			3	93.6	2.6	2.4
			5	91.8	5.8	5.3
4163.5	50	2次評価値	0	100.8	1.7	1.7
			1	93.4	5.6	5.2
			3	92.7	2.3	2.1
			5	93.6	1.9	1.8
8326.9	100	2次評価値×2	0	102.3	2.3	2.4
			1	98.3	1.8	1.8
			3	95.3	2.0	1.9
			5	95.4	1.6	1.5

2-7. 検量線（直線性）

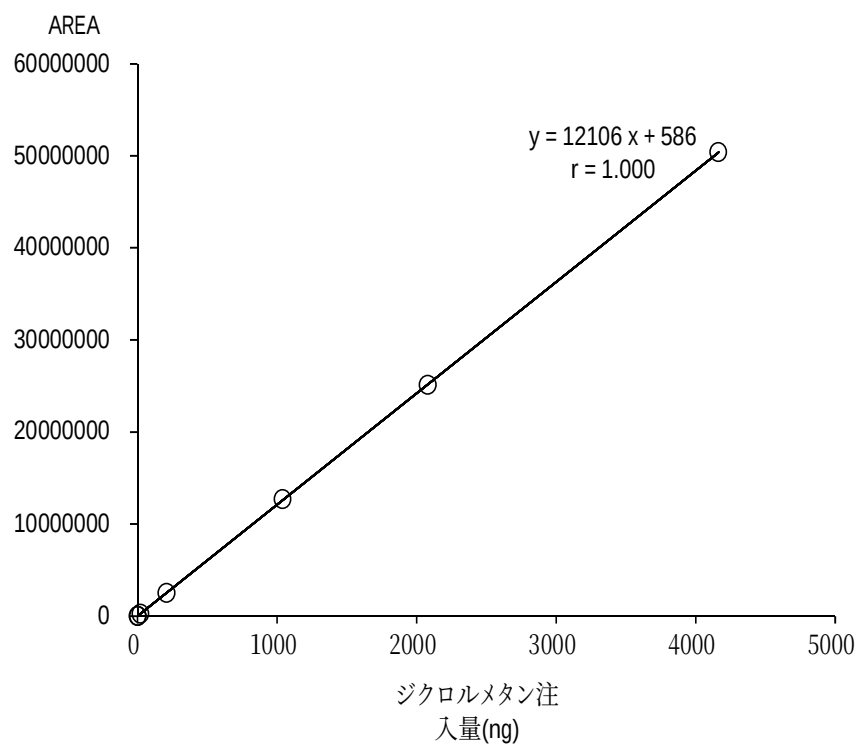


図2 DCM 検量線（注入量 0～4163.5 ng）

DCM 標準液を二硫化炭素により希釈し、0～4163.5 $\mu\text{g/ml}$ の範囲で標準系列を調製し、検量線の直線性について確認を行った。その結果、当該範囲で良好な直線性を示した（図 3、表 5）。

表5 DCM の標準系列（0～4163.5 $\mu\text{g/ml}$ ）

ジクロルメタン濃度 ($\mu\text{g/ml}$)	4時間捕集としての濃度(ppm)	相当の濃度	AREA		
			m/z 49	m/z 84	m/z 86
4163.5	100	2次評価値 $\times 2$	50414293	57786414	40778413
2081.7	50	2次評価値	25130462	29635630	21008746
1040.9	25	2次評価値/2	12710548	14678842	10085640
208.2	5	目標濃度 $\times 100$	2498650	2956511	2057743
20.82	0.5	目標濃度 $\times 10$	251704	314754	218847
2.08	0.050	目標濃度	2541	33451	22549
0.00	0.00	ブランク	0	0	0

2-8. 検出下限及び定量下限

表 6 に検出下限 (LOD) 及び定量下限 (LOQ) を示した。検出下限 (LOD) は目標濃度 (2 次評価値の 1/1,000) の標準液を 5 サンプル分析して標準偏差 (SD) を算出し、SD の 3 倍を検出下限値とした。LOQ ($\mu\text{ g/sample}$) は目標濃度値の標準液を 5 サンプル分析し、その標準偏差 (SD) を算出し、SD の 10 倍を定量下限値とした。

表 6 検出下限 (LOD) 及び定量下限 (LOQ)

直線範囲 (ng)	2.08~4163.5
相関係数	1.000
LOD ($\mu\text{ g/sample}$)	0.317
LOQ ($\mu\text{ g/sample}$)	1.057

また、添加回収試験の結果から、本法の定量下限は $1.057\mu\text{ g/sample}$ であったため、個人ばく露測定 (24 L 採気) の定量下限値は 12.69 ppb (0.0127 ppm) となった (表 7)。

表 7 測定法の定量下限

評価項目	定量下限
ジクロルメタン量	0.529 ($\mu\text{ g/ml}$)
24 L 採気時の気中濃度	12.7 (ppb) (0.0127 (ppm))

3. まとめ及び考察

3-1. 個人ばく露濃度測定法

本分析法では、作業環境測定ガイドブック 5 No.5029⁴⁾、OSHA Method no 59⁵⁾、NIOSH Manual 1005⁶⁾を参照して、作業環境気中の DCM 濃度を定量する方法を検討した。本分析法の特徴は、気中 DCM を活性炭管(球状活性炭)にて捕集することにより、GC-MS にて精度・感度良く分析できることである。定量下限値は 24 L 採気(吸引速度 0.1 L/min)で 12.70 ppb (0.0127 ppm)まであり、4 時間の個人ばく露濃度測定は目標濃度(0.05 ppm)まで十分に測定可能である。高濃度の領域では、2 次評価値の 2 倍の DCM 濃度(100 ppm)までの定量分析が可能であることを確認した。また、保存は冷蔵(4℃)にて 5 日間安定である。結論として、本 GC-MS 分析法では、個人ばく露濃度は、十分な精度と感度でもって定量分析することが可能となった。また、本分析法では、GC-MS を用いているため、他の有機溶剤物質等の共存物質との分離をキャピラリーカラムによる保持時間、および標準物質質量スペクトルのイオン強度比の一致性から同定し、ジクロルメタンは正確に分離定量可能と結論付けられた。

3-2. 本分析方法の作業環境中 DCM 濃度分析への適用

24L 採気時の気中 DCM 濃度の定量下限は 12.70 ppb (0.0127 ppm)となった。一方、作業環境測定のア測定、B 測定の採気時間を 10 分間（吸引速度 0.1 L/min）とすると採気量は 1.0 L(0.10 L/min×10 分)となり、この場合の定量下限は 304.77 ppb (0.305 ppm)になる。この値は 2 次評価値 50 ppm の 1/10 以下であり、本分析法は、作業環境中の DCM 測定に十分な精度をもって適用できると考えられる。

4. 引用文献

- 1) American Conference of Governmental Industrial Hygienists (ACGIH). 2013 TLVs and BEIs based on the Documentation of the Threshold Limit Values for Chemical Substances and Physical Agents & Biological Exposure Indices. ACGIH. Cincinnati, OH, USA.
- 2) 許容濃度等の勧告(2013 年度) 産業衛生学雑誌 2013:55 巻 182 -208 頁、日本産業衛生学会、東京
- 3) 作業環境測定ガイドブック 0 総集編 第 4 版第 4 刷 日本作業環境測定協会 平成 22 年 12 月 24 日
- 4) 作業環境測定ガイドブック 5 No.5029 改訂第 1 版 有機溶剤関係 261- 262 頁、日本作業環境測定協会 編集発行 平成 17 年 9 月 13 日
- 5) OSHA Analytical Method no 59 Methylene chloride. Occupational Safety and Health Administration (OSHA) Technical Center. United States Department of Labor, Salt Lake City, UT, USA. May 2000.
- 6) NIOSH Manual of Analytical Method (NMAM) 1005 Methylene chloride, National Institute for Occupational Safety and Health (NIOSH), Cincinnati, OH, USA. 15 March 2003

開発したジクロロメタン分析法の要約

構造式: CH ₂ Cl ₂	分子量: 84.93	CAS №: 75-09-2
許容濃度等: 産衛 (OEL) 50 ppm OSHA (PEL) 25 ppm ACGIH (TLV-TWA) 50 ppm	管理濃度: 50 ppm	物性等: 比重: 1.3266 at 20°C BP: 40°C at 76 torr MP: -95.1°C VP: 349 torr at 20°C

別名: Methylene dichloride、Methylene chloride

サンプリング	分析
サンプラー: 球状活性炭捕集管 258A (ガステック製) サンプリング流量: 0.1 L/min サンプリング時間: 240 min (24.0 L) 保存性: 8326.9 µg から 4.163 µg の添加の範囲で、冷蔵で 5 日間保存可能。 ブランク: 脱着溶媒およびサンプラーブランクともに検出されない。	分析方法: 質量分析計型検出器付ガスクロマトグラフ (GC-MS) 分析法 脱着: 二硫化炭素 (作業環境測定用) (和光純薬工業(株)), 2.0 mL (60 min 浸漬) 機器: GC-MS, 6890N Net Work System (Agilent Technologies 製) カラム: DB-WAX (60 m × 0.32 mm, 0.5 µm) (J&W 製) キャリアーガス: He (1.0 mL/min) オープン条件: 35°C (2 min) — 3°C/min — 200°C (2 min) 注入口温度: 200°C インターフェイス温度: 250°C イオン源温度: 220°C 注入口モ ード: パルスドスプリット (10:1) 注入量: 1 µL 定量モード: SIM 定量イオン (確認イオン): m/z 84 (m/z 49、m/z 86) 検量線: 2.08—4163.5 µg/mL の範囲で直線 定量法: 絶対検量線法
精度	
添加回収率 4.16 µg 添加で 94.2%、41.6 µg で 93.8%、4163.5 µg で 96.3%、8326.9 µg で 101.6% 検出下限 (3SD) 0.159 µg/mL (3.81 ppb, 0.1 L/min × 4 h) 定量下限 (10SD) 0.529 µg/mL (12.7 ppb, 0.1 L/min × 4 h)	

適用: 個人ばく露濃度測定

妨害: —

参考文献: 作業環境測定ガイドブック 5 No.5029 改訂第1版 有機溶剤関係 261- 262 頁、日本作業環境測定協会 編集発行 平成 17 年 9 月 13 日

NIOSH Manual of Analytical Method (NMAM) 1005 Methylene chloride, National Institute for Occupational Safety and Health (NIOSH), Cincinnati, OH, USA. 15 March 2003.

OSHA Analytical Method no 59 Methylene chloride. Occupational Safety and Health Administration (OSHA) Technical Center. United States Department of Labor, Salt Lake City, UT, USA. May 2000.

作成日 平成 26 年 2 月 27 日